

今年はこのほか秋の訪れが遅く感じます。
天高く馬肥ゆる秋、おいしい秋刀魚や新米がでまわるようになり
ました。



「洋服の仕立て屋」

ある小学生の男の子が急な雨に降られて、ずぶ濡れになって家
に帰ってきました。

お母さんは、男の子をすぐにお風呂に入れて風邪をひかない
ように早目に寝かせました。

次の日、いつものようにお母さんが起こそうとしたのですが、
男の子は起きることができません。起きようとしても布団の上
から動けないのです。

驚いた母親が医師に見てもらったところ、進行性の筋ジストロ
フィーであることがわかりました。

「この子は長くとも二〇歳までしか生きられない」

と医師に言われました。その夜、お母さんはお父さんに子ど
もの病気のことを話したのですが、寝つけなかった男の子は自分
が二〇歳までしか生きることができないという話を聞いてしま
いました。

その後、男の子は車いすに乗りながら学校に通いました。
中学生になる頃、お父さんが男の子に、

「将来、何になりたいんだ？ どの中学に行きたいんだ？」

とたずねました。男の子は、

「僕をもっとこれ以上騙すことはやめてほしい。僕が二〇歳まで
か生きられないことは、話を聞いて知っている。僕は、学校の先
生が『一日に二つ良いことをしなさい』と言ったので、一日に二つ
良いことをしようと思う。そうすれば、六〇歳まで生きたのと
同じになるから……」

と目に涙を浮かべながら話しました。驚いて何も言えないお
父さんに男の子は、

「僕は中学には行かない。それよりも、洋服の仕立て屋になるた
めに見習いに行きたい。死ぬまでにお父さんとお母さんにおそ
ろいの服を作って、着てもらった姿を見てから死んでいきたい」

と続けて話しました。

人生はどのくらい長く生きたのかではなくて、どのくらい真剣
に生きたのかが問われるのだと思いました。この男の子に負けな
いように、真剣に毎日を通していかないといけないですね。

どんな人でも必ず亡くなることは決まっています。しかし、自
分が亡くなることを意識して毎日を通している人は少ないと
思います。

どんな人にも一日二四時間は同じように与えられていますが、
一日の過ごし方で達成できることの数が変わってきます。

一〇年後に必ず生きていけると言える人は誰もいません。死を
意識する人が、

「どのように生きなければいけないか？」

とこのことを学べると思います。

いつか終わる人生を、時間の流れで考えることが大切です。

「小さな幸せに気づく24の物語」より抜粋

株式会社三悦

代表取締役 樋田 浩三

令和六年十月